

---

# NINO' s WAR

師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NINO・SWAR

### 【ZINE】

N7224A

### 【作者名】

師

### 【あらすじ】

世界は貧困時代を迎えていた。人間が往く道は餓えでしかない時代。餓えは戦争を呼び、戦争は戦争を呼び込む。人は戦争を止めることは出来ないのか。戦場で育つた子供が求めるものは一体なんなのだろうか。

第一式 戰場の子供（前書き）

第一式 戰場の子供

## 第一式 戦場の子供

いつの頃か、もう定かではない。

はるか昔なのか、遠い未来だつたか・・・。

時から見捨てられた人々がいつしか独自の文明を切り開き、国を構え、第三国が世界を作り出していた。

しかし、愚かにも一国の一血統が、自國を唯一のものとせんと、他国との争いを始めようとしていた時代。世界は灰色の渦に飲み込まれようとしていた。

人々は混沌とした世界に一筋の光と言わんばかりに、救世主の伝説が蔓延つた。しかし、いつになつても救世主など現れることはなく、伝説は人から人へと受け継がれるだけの、ただの言い伝えと化してしまつた。

もはや、人々に縋るものは何もなくなり、貧富の差が広がっていくばかりであった。

人々が貧しさから抜け出せる方法はないのか？生まれた瞬間から、死に向かつて貧しさに耐えるだけなのか。

国の発展は自由の拡大なのか、相互に支えあう道はないのか古きに与かりし新しきを為すことは出来ないのか。

人間は生存を脅かされたり、尊厳を冒されることなく創造的な生活を営むべきはずなのに、貧しさという抑制からの開放は永遠に来ないのだろうか。

### 霧雨の章 第一式 戦場の子供

「起きる」

男の声がした。とても低い声だ。年は三十代後半位だろうか。イラライラしているのが分かった。「死ぬなら向こうで死ね」

何か言つてゐる。しかし、何か言つてゐるか分からなかつた。言葉が違つ。他民族だらう内容が理解できない。ただ声のトーンから下品さが伺われ、貴族ではなさそつだつた。兵隊でもなさそつだ。

「オイ、起きる」

声がはつきり耳に届くにしれ、次第に意識を取り戻す。  
頬に冷たいものが当たつた。

液体らしく頬に当たるとつづーっと伝つた。そしてまた、ぽつり、  
頬に当たつた。

意識してみると、その冷たい液体はそこからかしこと、顔じゅう  
当たつっていた。不愉快さが体の神経に生まれる。と、同時に指がぴ  
くんと跳ね上がつた。

胴体が何かでぐいぐい押されているのを感じた。なすがままにして  
いると、頭が固いものでそれ痛みを覚えた。しかし、それは摩擦ら  
しい摩擦ではなく、奇妙にぬるぬるとしていた。

一体なんなんだ。

体感する正体の答えが得られず、うつすら目を開けた。

目に飛び込む液体に鋭敏な瞳が反応して目蓋を思わず閉じた。

「起きろ！」

ドカツ！

鈍い音と共に腹部に強い痛みを感じた。

自分の体が宙に浮き、ドサリ、地面に落ちた。

強い衝撃。一気に覚醒する。

「のたれ死ぬなら向こうで死ね」

腹を蹴られた衝撃で吐き気を覚えた。

胸がむかつき、胃がぐぐつと痙攣の筋肉運動を起こす。口に湧き  
上がる酸味の液に堪らずげほげほと吐瀉した。

どうやら大量に水を飲み込んでいたらしい。口から出るものは水  
分ばかりだつた。塩くさく、辛い。海の水だと分かる。

「クソがき。生きていやがるのか」

わけが分からず声の主に顔を上げた。

男は黒い布を頭から覆い被り、低身長のせいか地に引きずつてい  
た。雨に濡れても厭わない様はさも怪しげだった。顔を見ようとするが、視点が合わずおぼろげで、男の背後に忍び寄る灰色の雲がよ  
り一層、奇怪さに拍車をかけていた。

「生きているなら身分証明書と入国証明書を見せろ」

男が手を差し出してきた。

やはり何を言われたか分からぬが、差し出された手に条件反射で  
体をまさぐつた。

手が胸ポケットの異物を見つける。

羊皮紙に書かれた身分証明書と入稿証明書だ。

「早く見せろ」

男は胸元から奪い取ると、身分証明に書かれた情報と照らし合わ  
せるかの如く、ちらちらちらちらを見た。

そして、暫くすると納得したのだろうか、一枚の羊皮紙を乱暴に  
放り投げ、背を向けて言つた。

「ようこそ、ダルフィールへ」

理解できる言葉だつた。「入国を許可する」

昼だというのに太陽はどこにもなく、光だけが雲に反射し、雨を  
鈍く光らせていた。

「起きて」

促す声が聞こえた。「起きて」

その声にはつと飛び起きた。

蹴り上げられる！

一瞬そう思つたが、そこに薄暗さはどこにもなかつた。

眩しい光。

思わずぐっと目を閉じて腕で顔を覆い隠すが眼瞼に感じる程、光は  
こうこううと光つてゐる。

「二一ナ、おはよつー！」

明るい声だ。

光に慣れた片田を開くと、小さな少年の顔が飛び込んできた。

「え・・・？」

自分が二一ナと呼ばれたことに違和感を感じ、耳を疑つた。  
少年はにんまり笑つて、

「お母さんー！二一ナ起きたよーー！」

真横で声を張り上げた。

二一ナはベッドの上で飛び起きた不恰好のまま硬直した。

明るい太陽の光。草の良い匂いが鼻に付く。農耕の香りだ。そして料理の匂い。急激に食欲がそそられる。

「おそよづ、二一ナ」

両田を開けると、お母さんと呼ばれた人がこちらを見て、優しげに微笑んだ。

二一ナは顔を覆つっていた腕を下ろした。

「なんだ、夢か・・・」

飛び起きた格好を崩し、ぼてつ、と再び横になる。

「また変な夢みたのー？」

「エト・・・

脱力してしまつた二一ナに、エトがにこにこしながら肘を付いて独り言に飛びついてきた。

「変とはなんだ、変とは

怖い夢なんだから。

二一ナは起き上がりエトの首を軽く絞めあげる。

「やだー。母さんー二一ナがいぢめるー」

エトははしゃぎながら苦しい振りをした。

二一ナ、女の子なんだから、はしゃいでないで少し家事を手伝つて

母親は苦笑し、「エトもお姉ちゃんをからかわないの」背を向けて家事の続きをします。

食卓の準備をする母親。自分になつく可愛い弟。

平和そのものの風景だ。先ほどの夢とは無縁だ。似ても似つかない。灰色の空、冷たい雨、他国の言葉を使う怪しげな男、みすぼらしくのたれている自分の姿には程遠い。

全く身に覚えがない・・・。

何故自分はあんな夢を見るのだろう。いつも不思議に思う。毎日ではないにしろ、頻繁に同じ夢を見るせいで二ーナは苦痛を感じていた。思いあまつて、仕方なく村一番のおばばに相談したこともあつた。しかし、ただの疲れだろうと言つ。二ーナの体は至つて健康そのもの。病気でもなんでもなかつた。元気すぎるあまり「二ーナが病気になつたら天と地がひっくり返るわ」とまで言われてしまつ始めたで、まじないも、薬草も与えてはくれなかつた。

おばばがどこも悪くないと言うのなら確かになんだろうが・・・。

しかし、合点がいかない。何故なら、おばばが言う様な、さほど疲れる事を二ーナはしていなかつた。いつも通り朝には起きて、農耕をして、夕方には帰宅して、夜には寝付く。そのような「ぐぐぐ」平凡な生活を二ーナはしている。なのに、あんな夢を見る。

自分でも気がつかない間にどこかでストレスを感じているのだろうか。

しかし一体何に?

何度自問しても思い当たるふしはなかつた。

「いくら考えても覚えが無いものは無いものね」

二ーナは肩を竦めると朝食を取るために食卓へと向かつた。

いつもの野菜スープと小麦粉で練つた小さな発酵パン。彩りの無い食卓。

野菜スープといつてもじやがいもと人参だけが入つたものだ。それ以上のものはない。何故なら二ーナの家は貧しかつた。二ーナが幼い頃、父は病気で死んだ。そして他の男手なる存在はなく、母が女で一つ、弟と自分を育ててているからだ。そしてなにより、農牧以外でいくら母が織物の別労働したとしても、女だからといって十分

な賃金を与えられていなかつたり、農牧の場所請負制による余分な運上金を取られたりしていいるからだつた。

それは二ーナの家だけではなかつた。女といつだけで賃金問題に発展する事は日常的なことであり、その他の事でもやはり少なからずの差別はあつた。

もともとこの国、ダルフィール国には差別などあまりなかつた。しかし、他国との戦争で国が発展するにつれ貧富の差が激しくなり、ついには、貧困層は国から住まいの分別を図られてしまつた。そして、貧困層の住む地域を『ムスリム』と別名を設けることから異様な差別が始まつた。

その様な同民族からの差別や、戦争に男が駆り出される事で男の希少価値が高くなり、民衆の間には古い固定観念が定着してしまつた。そうしなければムスリムは成り立たつていかなかつたのだろう。いつしかムスリムは国から見放された、一固体の自治村と化した。乾いた土にいくら苗を植えてもやせた大地はわずかな実りすら出し渋り、羊も乏しい草に餓え、なかなか乳を出さない。それにも負けず、人々は微量の収穫に感謝し、老いて朽ち果てるまで働き続ける。ムスリムで贅沢なるものは何一つなかつた。ただ生まれ、己の人生を全うし、働き、死んでいく。それ以上の事はなかつた。生まれた瞬間から、ただひたすら死へ向かうだけの人生。なんて虚しく、哀しい人生だろうか。

なんという貧しさなのだろう。

飢える貧困。そんな中でも二ーナは幸せだつた。優しい母と弟。平和な毎日の営み。母の織り上げた服を着て母の織り上げた布団で一日の疲れを取る。慎ましくもそれで幸せだつた。

そして弟のエトは今は十歳そこそこの子供に過ぎないが、いつかは成人し、立派な男手となるのだ。そうすれば、今の生活も少しは楽になるのだ。また、自分もいつかは嫁ぎ、結納金も貰えるだろう。母親を楽にさせてやれる。

「二ーナ、もう少し女らしく食べなさい」

朝から男のようにガツガツ食べている二一ナに母が笑う。

二一ナは腰までの髪こそあるから女だと分かるが、それがなければまるで少年の様だった。母子家庭の長女であるからだろうか、立ち居振る舞いも心情も少年そのもの様に気高かった。それでいて、民族でも珍しく色が白く目は大きく綺麗な面持ちをしていた。

「それから今日は、畑が終わってからちゃんと河で体と髪を洗うのよ」

笑いながら母が突拍子もない事を言つた。

「え? どうして?」

二一ナは食事の手を止めぽかんとした。

農牧で汚れた手足しを河で洗うことがあっても、祝い事がある以外は体や髪までは滅多に洗わなかつた。

「どうしてつて、今日はあなたの十一の誕生日でしょう。成人になるのよ。祝賀会があるのを忘れていた?」

忘れていた。

二一ナは気まずそうに顔を歪めた。

ダルフィールでは、男は十三で、女は十一で成人と見なされる。

成人となれば一生に一度の事。故に、祝賀が盛大に行われる。

祝賀会は楽しいし、知り合いが総出で祝つてくれるから何よりも嬉しかつた。しかし、嬉しいのは今まで二一ナが祝う立場だつたらであり、自分が祝われる立場にあるのは釈然としなかつた。なぜなら、

「正装しないと駄目?」

だからである。

「当たりえでしょ。そのためにお母さん毎日毎日、いつも以上に機織場に籠つっていたんですから」

それはそれは良い布が仕上がつたのよ。

母は高揚で顔を赤らめた。

そう言えばそつだつた。

ここ最近、二一ナが夕方に農耕を終えても、母はまだ機織場から

帰宅せずに夕飯の支度を二一ナにさせていたし、夜遅くに帰宅したらしく縫い物の夜業をしていた。体の事が心配で母に早く寝るよう催促しても「仕上げてしまわないと」と言つては夜業に徹していたのだった。

二一ナは頼まれて一氣呵成に仕上げているのだろうと思い、敢えて何も聞かず、また翌日には朝早くから農作業が待つてるので早々と床に就いていた。

母は母で、二一ナが何も聞いてはこないので、きっと分かっていた。母は母で、二一ナが何も聞いてはこないので、きっと分かっていた。母もまた、敢えて何も言わなかつた。

二一ナは眉を顰めた。

自分の為に夜業に徹していたのなら、そんなことはさせなかつたのに。

何も訊かなかつた事を後悔した。

「母さん、徹夜し続けて、病気が酷くなるよ」  
こんな台詞はもつと以前から言つべきだつたのに。

二一ナは口惜しくてならない。

「大丈夫よ。貴女の為ですから」

優しい母はそう微笑む。

二一ナが幼い頃は母も元気だつた。しかし、流行の病に一度倒れたらというものの、体は再起せず、すっかり弱つてしまつた。気がつけば、やせ衰えいつも咳き込むくらい心臓を悪くしていた。

今はただ、おばばの薬草でなんとか命を繋ぎとめているといった状態である。おばばが言つには、このまま無理をし続ければいつかは失明も免れなかつた。だから二一ナは少しも無理をさせたくなかつたのだ。「無理しないように」といつも声をかけて注意をするが、母がそれに素直に促されることはなく、知らぬ間に必要以上の仕事をし、無理をしている。しかし、それは二一ナと弟のためであり、それが母親の愛情というものであるのを二一ナは理解していた。母もまた、制する娘に「親になれば気持ちが分かるわ」と言

い聞かすのだつた。

「でも無理はしないでよ。絶対だよ？」

無駄とは分かつていても念を押す。

「分かつたわ」

母はうんうんと頷いた。「それよりも早く、畑に出ないと、もう鐘がなるわよ」

3、2、1、0

促すと同時に、一斉に鐘が鳴り響いた。

農牧開始の合図である。

「エト！ 行くよ！」

二一ナは残飯を口の中に詰め込むと、さつと入り口の肩掛けばんを掛け勢いよく玄関の扉を開けた。

春先の少し肌寒い風が、背後の家内へと広がる。

「二一ナ！ 待つて！」

慌てふためきながら、愛用の帽子を驚撫むエト。

二一ナは目を細めた。

明るい春の日差しが、空を流れる白い雲と共に新鮮さを詠つていた。

「どうして二一ナだけ竜が扱えるんだろう？」

エトは今更ながら、ふと沸いた疑問を投げかけた。

「さあ、気がつけば扱っていたからな。何故だろう」

二一ナは首を傾げてみせた。傾げた瞬間背後のエトがバランスを

崩しそうになりおたおたする。

「しつかり掴まつていろ」

「うん」

エトは二一ナの背の衣服を手に握りこんだ。

時は昼過ぎ。

二人は竜に跨り、森を詮索していた。農耕が一段落してから狩猟に来たのである。本日の祝賀会の為のごちそう探しだ。しかし、先程から探しているものの、手ごろな獲物が見つからず、ただ跨つてい

る竜の一足歩行で揺れるままに揺らされているだけだった。

一定の揺れが心地よさを呼ぶ。

「一ナはほんやりしないように気を尖らせた。

「だって、噂じや竜を扱えるのは遙か東のユダロ国の人だけだつて言つよ？」

エトはぐいぐい一ナの服を引っ張つた。

「お前に知識を教えているのは一体誰だ？」

どこからともなく知識を得てくる弟に、一ナは半ば呆れるように笑つた。「どうせ、いつもおやじさんのところで、だろう？」エトの頭は得体の知れない情報や、全く嘘の知識やらで溢れていた。時折、感心させられる事もあるので一ナとしては非常に興味深かつた。しかし、その出所がいかんせん問題だった。

「ドクター・セラティスはいい人だよ！」

「ムスリムでは少し変人扱いだぞ？」

「それでも知識は豊富だし、農畜だつて、彼の発明品で少しは楽になつてきたんだよ。彼は列記とした発明王さ。この間だつて・・・」

エトは息を荒くして彼がいかに凄い人物であるか熱弁しだす。

一ナはさして真剣に聞かず、はいはい、と相槌を打つた。

ドクター・セラティス。

年の頃は六十を入つただろうか。ムスリムの変わり者、いや、発明王である。

確かに彼の発明で農畜は楽になつた。例えば、『自動芝刈り収納機』などは、芝をその機会にセットするだけで使用しやすい大きさにカットされ、収納箱にきちんと整理整頓されるという代物である。また例えば、『自動苗植機』などはスイッチひとつで田圃の隅から隅まで走り、耕地の広さを認識し、一定の幅で苗を植えていく代物だ。

確かにどれも便利だが、その機能性を人目見れば、「機械が大そく過ぎて、むしろ手でやつた方が早いかもしない」と思つてしまふのである。しかも、『自動芝刈り収納機』に至つては物凄い騒音

と共に、かなりのエネルギーを必要としてしまい、あまり意味がない。『自動苗植機』に至つては、泥を撒き散らす走りをするのでこれも痛い発明である。

画期的と言えば画期的なのが……

詰めが甘いのだ。

ムスリムの人々は、そんなドクター・セラティスをやつかい者扱いはしないものの、変人扱いをしている。しかし、列記とした発明家であると賞賛する人もいる。何故なら、ドクターが発明したのは全て根性の入つたものではあるし、第一に入々が楽に生活出来る様にと考えているし、発明の全部が全部、失敗作でもなかつたからだ。中でも一番役に立つてゐるものは、『他国人撃退線』である。ムスリムとダルフィールの境目全土には目に見えない電線が張られてゐる。ムスリム以外の人間が電線に触るとたちまち村中に伝達が行く仕組みになつてゐる代物である。

それに関してはムスリムの誰しもが頷く発明だつた。二一ナも感心した覚えがある。

「あんまり彼に陶酔するなよ」

二一ナは言が、しかし、エトはドクターに夢中である。

「今回のドクターと僕が開発したのがコレ！」

見て見て、と二一ナの背中をぐいぐい引っ張つた。

二一ナは手綱を放してしまわないように、背後のエトに振り返つた。

いつの間にか、エトの右目に、一見眼鏡に見える、得たいの知れないものが装着されていた。

「なんだそれは？」

眼鏡と言つても、やたら何重にもレンズが重なり合つてある。

「コレはね……」

にんまり笑いながら、エトはレンズの重なる順番をかちやかちや言わせながら変え合わせた。「ほら！レンズの組み合わせ方次第でどんな遠距離でも近くに、どんな細かいものでも大きく見えるんだ

よー。」

そういうエトの右目がレンズ一杯に大きく広がり、片目の大きな奇妙な生き物みたいになつた。

「・・・・・ そうか」

見てくれの良いものではないな・・・

「二一ナの毛穴まで見えるよ！汚れている！」

「・・・・・ そうか」

二一ナは呆れて前を向いた。

「細かいメモリも入ってるんだよ。距離も分かるし角度も分かる。狩に最適だよ！」

自分も発明に加わったと代物にエトが高揚する。「ユダ人は目がいいから、こんなものはいらないらしいよ。ねえ、さつきの噂って本当かな？」

我が弟は何ゆえユダ人に拘るのだろう・・・

二一ナは少し項垂れた。

「噂じゃない。ユダ人が竜を扱えるのは本当だし、ユダ人だけが竜を扱う方法を知っているというのも本当だろ。ユダ口人の事を竜使いと言つ位なんだから」

「そうなの？」

エトは目を丸くした。

「なんでもユダ口では農畜は竜で行つてゐるそうだ。竜で地を歩き、竜で空を舞う」

竜が農畜で人の手助けになるのなら、これ程力強い助けはないだろうな。「羨ましい事だ」

ムスリムでもそのように竜が普及すればどれほど楽なことか。ドクターも無駄な発明に勤しむ事もなからうに・・・

噂によると竜といつものは竜使いでしか扱いを知らず、竜使いによつて扱われなかつた竜は凶暴になり、ついには人を襲うと言う。竜の交配から飼育まですべて竜使いが担つてゐるというのだ。しかし、何故だか二一ナの家には竜がいる。ムスリムに竜がいること自体不

思議な事であるにもかかわらず、二ーナは竜の扱いが出来る。

他国の竜がいつしか住み着き、竜使いでもない娘が竜を扱えると  
いうことは、ムスリムでなくともたいそう妙な事だった。二ーナは  
ムスリムの生まれで竜使いではない。しかし、竜は人に危害を加え  
る事なく、素直に二ーナの言う事だけを聞く。母に言わせると最初  
はたいそうムスリム中で大騒ぎになつたが、竜の力強さは何かにつ  
けては役立つっていたので、次第に誰も何もいわなくなつたそうだ。

「じゃ、二ーナはユダ人？」

エトは急に不安そうな顔をした。

「まさか」

弟の安直な思考に二ーナは破顔する。「母さんが言うには、その  
昔、旅で流れに流れついた竜使いが母さんの恩恵を受けた御礼に自  
分の竜を差し出したそうだ。もつとも私は幼くて覚えてはいないが  
ともかく、気がつけば竜に跨り自由に扱っていた。「たまたま私  
と気が合つた竜だったのだろう。なあ フォウ？」

二ーナは跨つている竜を見下ろし、手綱を軽く引っ張つた。

「フォウと呼ばれた竜は返答するかのように、  
きゅー

鳴いた。

フォウは珍しい成りをした竜だつた。

フォウが子供の竜なのか、成人した竜なのかは不明であるが、体は  
蒼く、皮膚の表面はつるつるして産毛が少しあるくらいだ。触り心  
地は人肌と大して代わりが無く、目玉はソフトボールくらい大きい。  
長い尻尾で二足歩行のバランスをとり、高さは百八十弱ほどで、左  
右に一メートルの大きな翼があつた。そこまでは、もしかすると普  
通の竜と同じかもしない。ただ奇妙にフォウは左右目の色が違つ  
ていた。右は灰色の目をしているが、左目は紅蓮だつた。いくらム  
スリムの人間が竜をあまり見たことがなくとも、それが奇妙なこと  
であることは理解できた。

特異な竜。それを連れいていた旅人もきつと特異だつたに違いない。

ユダ人なのか、はたまた違った人種なのか・・・。思いに耽つていると、遠くでカサリ、草音がした。はつとニーナは顔を上げた。

「どうしたの、ニーナ？」

「黙つて」

ニーナは全身を研ぎ澄ませた。耳で草音のした地点を探る。主人の異変にフォウも歩く足を止め、首を垂れ、鼻をひくひくさせた。

カサ、カサ

草音が森中に響く。

ニーナの目が見開かれると同時に望遠レンズのピントを合わせるがごとく遠方の草音の地点の景色が目に飛び込んだ。見つけた！

ニーナはフォウの胸を両足で蹴る。

フォウが合図に走りだした。

「エト！ しつかり捕まれ！」

「わっ！」

その声に物音の主もこぢりに気が付き逃げ出した。

「飛ばすに走れ！」

命令されるままフォウは地を駆け抜ける。疾風が如し走り。

あまりの速さに視界に入る木々が歪んで見える。木々がニーナ達に道を開けているかの様だ。

エトはその速さで振り落とされないようニーナにしがみついく。そして慌てて、何重にも重なつてているレンズをガチャガチャと合わせ、標的に標準を合わせた。

「左方向に三十度！ 距離七百フィート！」

エトの情報にニーナはすっと胴体を屈めた。

「加速！」

フォウは翼を折り込んだ。

風の抵抗がなくなり、更に走りが加速される。

二一ナは手綱を放しフオウの胴体を両足で挟みバランスを取った。

「左三十度！回り込め！」

二一ナは左の<sup>えび</sup>から矢を一本さつと抜いて弓に構える、そして、  
フオウの体が左三十度に傾いた瞬間、  
獲物の背がぐんっと二一ナの視界に入り込み、  
捉えた！

勢よく矢を放った。

矢は抵抗する空気をも切り裂き、我が身の糧とし、ぐんぐん加速す  
る。そして、

ザシユ！

矢が勢よく獲物を貫いた。

肉体から血は飛び出ことなく、獲物は地へ落ちた。

「捕獲！」

エトはまたレンズを力チャ力チャと合わせた。

フオウの走りが緩やかに止まる。

二一ナは弓を放った体系を緩めた。

「フオウ、よくやつた」

二一ナはフオウの首をなげた。  
撫ぜられる心地よさに

きゅー・・・

甘えた声を出した。

フオウは二一ナが促すまでもなく、体をゆらゆら揺りし、二一ナ  
が打ち落とした獲物へと近づいた。

獲物は既に息絶えていたが、まだことなく、生を感じさせてい  
た。

エトは二一ナの背から手を離し、フオウから飛び降り、

「よし」

獲物から矢を抜いた。「どうぞ」

「よし」

二一ナはさつとフォウから降りると、短剣を取り出し、自分の右手の人差し指をうすく切った。

鮮血が滴る。

二一ナは血の滲む指で獲物の体に印をつけた。赤い血は皮膚を這い、血の生々しい独特の臭いが鼻を掠めた。

二一ナは膝間着くと手を合わせ、頭を下げた。

「その命、我が糧となり我が身の生を保て」

洗礼を受けると、矢を抜いた傷口から白い煙が出て二一ナの体にまとわり付いた。

そして、獲物はただの肉の塊と化した。

「これで魂は昇天した」

ムスリムでは狩猟をする際、ただ狩るだけではなく、こうして神の恵みに沐することを民族の慣わしとしていた。そうする事で、無駄な命を捕らざして慮る様にしている。人間が欲する程に狩猟してはたちまち動物は絶滅してしまつだろう。動物と共存しなければならない、農畜をするムスリムの知恵であった。

エトは肉から抜いた矢の先を見た。

枯れ木で作った上差しの鏑矢である。枯れ木で創作しているので、その細さは普通の矢とは異なり至極頼りなかつた。また、一本一本と太さもまちまちで、むしろ矢とは言い難かつた。しかし、二一ナは己の腕力と正確な角度を鋭角に持つてして仕留めてしまう。幼くも二一ナの腕前は、ムスリムの男たちも平伏す程である。

そんな二一ナにエトは狩猟に出る度に感服していた。狩猟に出て、今まで一度も二一ナの的を外した素矢を見たことがなかつた。

「この矢先、駄目になつてる」

何度も使うせいか、鏑が砕けていた。

「うん。でも今一度くらい使えるかと思つたんだ」

二一ナは笑つた。「使えるだけ使わないと」

聞くなりエトはぎょっとした。

ただでさえ、ひょろりとした矢を使つてゐるにもかかわらず、鏑

まで役立たずだつた矢で良く仕留められたものだ。

「二一ナがいれば怖いものなしだね」

エトは歓心した。

「私にも怖いものくらいあるぞ」

二一ナはエトの頭をがしがし撫ぜ笑つた。

「何が怖いの？」

「そうだな・・・」

二一ナは腕を組んで考へると、「そうだ、水が苦手だ」人差し指をエトに突きつけた。

「水う？」

「多分・・・」

人差し指の頭が垂れる。

「だからまめに体を洗わないの？」

二一ナは女には珍しく、必要以上の水浴を好まなかつた。

「水浴び自体が嫌いではない・・・」

水が嫌いと言つわけではなかつた。ただ、水が側にあると、あの奇妙な夢を思い出してしまい、途端に得も言えぬ感情が沸き起つるのだ。暗い闇に足を取られ、底なし沼のように己の感情がズるずると引きずりこまれていく。それは神から罰を受ける教徒の末路か、天使から悪魔に摩り替わる瞬間のようだつた。惨めにひたすら受理されない救いを求める、現実の気高さとは裏腹の、我を忘れて無様に手を伸ばしている自分がそこにはあつた。

「に、しても・・・」

二一ナは獲物を腰の帯に縛りつけ、「その眼鏡、少しほは役に立つようだな」

仕留める時間が早くなる。

二一ナはふとつと笑つた。

「でしょー！」

ようやく自分の発明品の出来栄えに満足を見える姉に、ふふんと得意げに胸を張つて仰け反つた。しかし、仰け反るあまり、自分の

頭の重みでそのまま後ろに倒れた。

「あいたツ」

「・・・・・・・・ セて、次の獲物でも探すか」

姉は無様な弟に手を貸す気にはとうていなれなかつた。

一匹目を仕留めたところで、二ーナは森の天井を見上げた。

緑の葉々の隙間から太陽の位置を確認する。

三時頃か・・・

そろそろ母が畠に差し入れを持つてくる時間帯である。

「二ーナ、そろそろ戻らないと・・・」

魂昇天の儀式を終えた二ーナを見下ろした。

「そうだな」

大量の捕獲がバレては元も子もない。きっと理由を聞き出され咎められるに決まっている。

二ーナはすくっと立ち上がり、

「獲物を売りに行く」

短剣を鞘に戻した。

「町に行くの？」

「そう。今までの売り上げと、今日のこれを売れば、もう薬が買える額になつてゐるだろう」

二ーナは捕獲した獲物をフォウの背に乗せた。

ダルフィールの町には進化した薬が多種多様にあるという。二ーナはそれを買うため毎日の狩を多日に行つていた。獲物を町の市場で売り金を得るのだ。そして、その金で母の心臓病の薬を買うために他ならなかつた。

金儲けの為の殺生など、本当はしてはいけないのだが、やむ終えなかつた。

ムスリムーのおばばのまじないも薬草も駄目なのだ。残るはダルフィールの町に蔓延る、他国から取り寄せられている薬のみだろう。

「最後の望みだな」

「一ーナの言葉にエトは頷いた。

「一ーナ、これも」

エトはすっとポケットから差し出した。

数枚の金貨。

「これは？」

「僕の発明で少し得た金貨さ」

「一ーナは眉を顰めた。まさか・・・

「お前、町に行つたのか？」

いつの間に？

エトは首を振った。

「ううん、違うよ。一ーナじゃないんだから、僕なんかがムスリムを抜け出したらすぐバレちゃうよ」

「しかし、金貨は町にしかないだろ？..」

「隣のアムネスティ夫妻のお手伝いさ、あの人たち、最近になつてダルフィールから追い出されてきたムスリムの新人でしょ？まだいくらか金貨を持つてたのさ」

なるほど、そうか。

一ーナは納得した。

一ーナの隣人、アムネスティ夫妻。

すでに随分な年寄りだが、たつた一人で細々と生活を営んでいる一人である。なんでも、アムネスティ夫妻は、他国への貿易を生業としていたが、入国許可のない移民人を匿つたとか匿わなかつたとかで財産の殆んどを国に没収されてしまい、泣く泣くムスリムに移り住んだと聞いた。

「まだ金貨を持っていたのか」

「自給自足のムスリムじゃ使わないものね。ただの金属にすぎないんだよ」

エトは肩をすくめた。「年もとつてゐし、一人じゃ農耕が辛いみたいで、『自動鉈』をあげたの」

『自動鉈』

聞きなれない名前だ。また何を発明したのだ？

「なんだそれは」

「チープな機械だよ。」「つ、鉈を振り下ろすだけの機械」  
エトは鉈の動く様を手で真似る。「テコの原理と石の錘で動くから、  
エネルギーも要らない。永久自動だよ」

簡単簡単、とエトは笑つた。

二ーナは結構意外と凄い発明なんじゃないのかと思いつつ、エトに  
笑いを合わせる。

「だからそれも使って」

「ありがとう」

二ーナは幼いながらも稼いだエトの金貨を握り締めた。  
「すぐ戻つてくれるよね？」

「ああ」

二ーナはフオウの首に手をかけ、背中へと軽やかに飛び乗つた。  
そして、背中にある一つの獲物を見比べると、

「エト！」

二ーナは本日の夕飯分の肉をエトに放つた。

空に舞う、飯のタネ。

エトはあわあわと脚を絡めそつになりながらタネに見入る。  
ドサツ！

「痛ッ！」

タネを受けるとエトは重みに耐えかねて地へとぶさまに尻もちを  
ついた。

「一人前には程遠いな」

二ーナが高らかに笑う。

「痛いッー！」

エトは痛さに脚をバタつかせた。しかし、どんなに痛くとも、大事  
な食料だけは手放さなかつた。

「優秀だ」

褒めてやらねば。

二一ナは垣間見えた弟の有望さに、にやり、笑い

「グッジョブ、エト」

親指を立てた。そして「後は頼む」

言うと

「ハツ！」

フォウの手綱を引き、一つ、嘶かせた。

フォウの前足が空氣を吸い込み、嘶きは大きな空氣の層となり、エトの服の裾や髪を躍らせた。

「行くぞ！ フォウ！」

勢いよく町へ振り向くと、全力疾走で走り去った。

やれやれ。

残された弟は、尻もちから立ち上がった。

「母さんはお見通しなんだよ？」

これからしなければならない母への姉の言い訳で頭を一杯にした。

見上げれば、天をも狭く感じさせる高い城壁。それらが都市をぐるりと囲んでいる。そして四方に大門が口を開いてる。大門はせわしく、車や人を飲み込み、吐き出していた。大門をくぐつてると、都の真ん中に林立するきらびやかな塔が見えてくる。都城である。ムスリムとはがらつと変わった雰囲気だ。

二一ナはちらりと山済みされた穀物を見た。

質がよく、豊満で黄金に輝いていた。

豊かさがここにはある・・・

派手な賑やかさがあつた。金の匂いも、色々な食物の匂いもした。ムスリムで感じる貧困さはどこにもなかつた。すれ違う人間の体臭さえも違つていた。

民族こそは同じゆえ、着物こそは似通つてゐるが質が違つていた。二一ナの着てゐる服は古びており、一見で町の人間でないことを明らかにしていた。

同民族なのに・・・

二一ナは俯きながら、きらびやかな賑わいに違和感を感じた。

一方では金が蔓延るほど発展している。一方ではムスリムという、金など何の役にも立たない地域もある。

無常だ。

二一ナは思った。ぐつとフォウの手綱を握り締めた。

我らには誇りがある・・・

そう心で言い訳するが、顔を上げることは出来なかつた。ここではムスリムと分かればダルフィール市民軍、ミリシアが何かと因縁をつけてくるのだ。むやみやたらに顔を上げて歩いていてはミリシアと目が合つてしまつ。

ミリシアは貧しくなつた市民等で構成されていた。貧困になつてしまつた市民は、国からムスリムに行くか、兵役に服するかどうか選択権が与えられていた。ミリシアはムスリムへと追い立てられぬ代わりに兵となつた元は市民である。国から飯を貰う代償に身を売つたのだ。飯を貰う以外は何も与えられない。ただ、国が命じれば戦場へと赴き命を落とすだけだ。

戦争と貧しさの狭間で生きるだけ、それがミリシアである。身を売る前は良き人間であつただろう人さえ変貌する。口が硬くなり、敵意のある沈黙が他人と見えない壁を作つていた。

氣をつけなければ・・・

二一ナは衣を被り、顔を隠した。

因縁をつけてこられては衣服や剣を奪われる。金貨を持つていようものならたちまち文なしにされてしまつ。

金貨を持っていると悟られては元も子もない。貴重なムスリムの獲物を売つて、やつと溜め込んだ金貨だ。みすみす取られてはならなかつた。

ふと、二一ナの前方から大きな車が一台やってきた。

ガタガタと異様な音を立てていた。大きさばかりの古びた車両だつた。

三匹の駄獣が引く、装甲された車両。車両の上にはミリシアとは別

の政府軍の男三人が銃を構えていた。こちらに近づくにつれ、車両から異臭が漂ってきた。

大人三人分位の積荷。人目を避けるように布が被せてあった。大きさから見て、政府軍がまた古く腐った軍用物を運搬しているのだろう。

よくあることだ・・・

二一ナは黙つて何食わぬ顔で政府軍等の率いる車両の横を通り過ぎた。

すれ違う瞬間、巻き起こつた風で覆い被さつた布がふわりと浮いた。と、その時。

切れ目から、ちらり、中が見えた。

え?

二一ナは一瞬、我が眼を疑つた。

あれは・・・!

檻に入れられた、

「待て!」

二一ナはフォウの手綱を引き、過ぎ去つた政府軍へ勢いよく振り返つた。「待て! 中は人間ではないか!」

二一ナは叫んだが、車両の見張り役が一人がちらりとこちらを見ただけでそのまま通り過ぎようとした。

二一ナはフォウの手綱を引き、車両を追いかけた。

「待て! 政府軍! 開放しろ!」

二一ナは叫んだ。しかし、政府軍は何も聞こえなかつたように、何も見えなかつたように、無反応のままだつた。

二一ナは舌打ちをすると、檻に被せられてある布を思い切り引つ張つた。

ばさり・・・

檻から布がはだけ、中身があらわになる。

ぎゅうぎゅう詰めにされた人、人、また人。まるで物を詰め込んだかのような、無作為さがあつた。

二一ナは目を見張つた。

その無作為さに同調するかのように中に詰め込まれている人は死んだような目をしていた。

これが生きている人間なのか  
・・・

「小娘え！」

突然の怒鳴り声に一ノナは我に返つた。

車両の上から政府軍が一一向に銃口を向けた。

セレノ

頃の中

頭の中で言葉が木靈す。  
にもかかわらず、手足が竦んで動かない。

402 -

「オカガリ」

と、突然ニーナの体が宙に浮いた。同時に、右脇左に一筋の銃線

が走る。

次の瞬間、壁に体が叩き付なられた。「ぐはっ！」

## 強い衝撃。

体とし、外壁を通り越して内臓に激痛が走る

卷之六

一ノ瀬はそれを避けるともせず、壁伝いに、体がずるずると地へ

落ちた

ふち

肩から音がした。

一ーナは肩を見張った。大量に流れ出す血。銃線が空を切り、二

一ナの肩肉を切り裂いていたのだ。

卷之三

二一ナは肩口を押さえ込んだ。

「フオウ！」

顔を上げると、フォウの姿が見えない。

砂埃が散乱しており、政府軍も駄駄の引く車両も視界に入らずには来ない。

殺られたか！？

二十一  
方は魚に立たせたが、

田怒りあと、砂埃の中からひびきたり獸りしき生物が立ち上がつた。

卷之三

- 18 -

フオフはジーットからソツポンボシ美三郎

卷之二

守つたのである。

そして、向かられた銃口から「一ナを突き飛はす」と「一ナを

## 二十一 オリジナルの曲題題材がある

り出し、車両に向かつて走り出した。

と地を蹴り、高らかに車両の上へと飛び乗つた。

正月宣に南行にし  
れて隙だらけだつた。

ニーナは体を屈め、男の背後に回る。そして、ぐつと男の口を押さえ入み、巨剣で男の首を強く握った。

「今まで奪わぬ」

「ぐあつ！」

軽く裂いたが、それでも血しぶきが上がった。  
男は車両からもがき落ちた。

「小娘え！」

背後から別の男が二一ナに飛び掛った。

二一ナを背後から羽交い絞めにし、締め上げた。

「・・・・・・・・」

ぎりぎりと締め上げ、骨がぎしきし鳴る。二一ナは締め付けられ  
つつも、ぐっと手を伸ばし、男の腰に帯びた銃に手をかけ、相手に  
少し傾けると、

「ドンッ！」

「ぐはあっ！」

男は二一ナと突き飛ばし、ひざを抱えた。

銃弾は男のひざを貫いていた。

風が砂埃を巻き上げた。

二一ナの衣の裾が風に揺れた。

「そこまでだ小娘」

最後の一人が銃口を向け、標準完全にあわせていた。

「どうかな・・・」

言つが早いが二一ナは男に向かつて走りだした。と同時に男は発  
砲した。

「ズド・ズド・ズド・ズド！」

連打で発煙が上がる。

が、そこには二一ナの姿はなく、  
「！」

男の頭上に一瞬にして影が落とされた。

二一ナは体を軸に足を振り上げ、遠心力を利用して空に舞つてい  
た。

「なつ！」

二一ナは男の肩に足をかけると、そのまま勢いよく足をひねつた。  
「グギッ！」

鈍い音と共に最後の音は車両から落ちていった。

「青いな・・・」

二一ナはやりと笑った。

いや・・・最初は私の足が竦んでいた。  
狩で運動神経は培われていたが、戦闘の訓練は受けていない。  
怖気づいても仕方ないということか。

二一ナはふとため息をついた。

短剣をしまい、

「フォウ大丈夫か?」

二一ナは車両上から飛び降りた。

フォウは軽く尻尾を振った。

「いい子だ」

二一ナはフォウの首筋をひと撫ぜると、氣絶している政府軍の男から鍵を奪つた。

「勇気のあるものはこの檻から出る」  
ギイ。

檻を開錠した。

「?・?・?」

しかし、檻からは誰も出ようとしなかった。「お前たち、出ないのか」

誰一人、動こうとはしなかった。

それどころか二一ナに白い目さえ向けていた。

何故だ?・?・?

二一ナは顔を曇らせた。

自由を望まないのか?

身も心も奴隸に成り果て、死んでいるのか。  
ガシヤン!

二一ナは扉を勢いよく閉めた。

「好きにするがいい」

踵を返した。

「待つて！俺は出る！」

幼き声が背後からした。

「お前・・・」

檻から一人の幼き子供が飛び出してきた。

こんな子供までいたのか・・・。

飛び出してきたのはエトと変わらない位の子供だった。奴隸に気を取られていると、ざわざわと回りに野次馬が出来ているのに気が付いた。

「長いは無用だ。乗れ！」

「一ーナはフォウに飛び乗ると、手を差し出し子供の襟首を鷲&amp; #25681;みすると、フォウの背中へ引き上げた。「フ

オウ走れ！」

きゅー！

フォウは旋風の如く、強い脚力で走りだした。

背後で政府軍の救援だろうか、追つ手の声がしたが、フォウはもう距離を離していた。

城壁近くの隅の路地裏で足を止めた。

「ここまでくれば大丈夫だろ？」「

一ーナはフォウから降りると、子供を降ろしてやった。

じやらり・・・

金属の鈍い音がした。

足枷か・・

細い子供の足には似つかわしくなかつた。足枷は子供の両足をがっちり掴み、チーンで動きを制御していた。鉄の重さは子供の足に痣を作り上げていた。

「痛いか？」

「足が腐りそうだ・・

「座れ」

子供はいわれるまま素直に座り込んだ。

「一ノナは短剣を取り出しチヨーンの穴に短剣の先を当て、ぐつと力をこめて切断した。

頭から髪留めに使用してた針棒を抜いた。

「一ノナの束ねていた髪の毛がさらりと広がる。子供の足をひざに乗せると、足枷の鍵穴に針棒を差し込んだ。

「名は？」

「モン」

「いくつだ」

「十一」

ガチャヤリ

足枷の鍵が開いた。

「ありがとう。器用じやん、アンタ」

「年上には敬語を使え」

「うん」

エトに教えてもらつた無駄知識が役に立つたな。

「一ノナはこつそりエトに感謝をした。

「アンタ強いね」

「アンタじやない、一ノナだ」

「一ノナはモンの頭を小突いた。『強くはない、運が良かつただけだ』

「一ノナはユダ人なのか？」

「違う」

「竜を扱つてゐるじやん」

「しかし違う。事情があつてね、竜を貰つたんだ。私はダルフィール人だ」

「そつか・・・ユダ人じやないのか」

モンは視線を落とした。

「ユダ人に何かあるのか？」

「うん・・・」

おどき話を思い出したんだ。

モンは癌になつた足首を撫ぜた。

「ユダ人はもう全滅したんじゃないのか。ユダ口国も滅んだと聞く。

」

「一ーナはぼそりつぶやいた。

「離散・・・ディアスボアしているとも言われてるじゃん  
「探せば生き残りはいるかもしねないな」

「一ーナは肩をすくめた。

それはともかく・・・

「モン・・・これからどうする」

「俺はミリシアになる」

「ミリシア？・・・何故だ」

「一ーナは顔眉間にしわを寄せた。

「やつら政府軍は俺の町を焼いた。母さんも父さんも殺された。だから兵士になつて敵を殺すんだ！」

「ミリシアになつても政府軍に復讐は出来ないだろ？。ミリシアは政府軍の傘下だ」

「それはたてまえさ。」

モンは路地裏の隙間から垣間見せる人通りに目をやつた。「まだ、確定はしてないけれど、政府軍はミリシアの武装解除をしようとしている。」

「ミリシアを失くすのか？」

モンは力強く頷いた。

「ミリシアの増加傾向に政府はおびえだしたのさ。もしミリシアで武装解除しないまま反乱が起これば政府はたちまち傾いてしまう」

「ミリシアが政府軍に吸収されるのか？」

「いいや、ダルフィール政府は单一国家を目指してゐる。だから他民族で構成されているミリシアを排除する氣だ。」

「ミリシアはダルフィール人だろ？」

「アンタ、何も知らないんだな・・・」

モンはあきれた顔で一ーナを見た。

「あいにくムスリム出身でね。ムスリムの外の」とには無頓着なんだ

「ムスリムか……」

「そ、貧困層」

「貧困だけど、自給自足で皆それなりに幸せだと聞いたことがある」「確かにね」

政府だのミリシアだの政府軍だのとは無縁だな。  
「ミリシアはダルフィールの国籍を持った元は他民族さ。海の向こうから渡ってきたヤツが多い。飢餓から逃れに逃れてやつてきたのや」

飯にありつく為に。

「だけど……ミリシアはもう政府からただ飯を貰うことではなくなる。そうすれば不和が起こって反乱が起こるだろう。政府はダルフィール全土に徵兵令を出すだろう」

「どっちにしろ反乱が起こるじゃないか」

「政府は排除する理由がほしいのや。ミリシアの武装解除をする」とミリシアの反乱をあおり排除の理由にこじつけるのさ」「どちらにしろ政府の思うつぼじゃないか」

「一ナはぽりぽりと頭をかいだ。

「ミリシアの反乱は武装解除に対する異議だけじゃない。自分たちの血を守るためにもあるんだ」

「モン……」

「俺もダルフィール人じゃないイデイッシュ人だ。だから……ミリシアになつて敵を討つ！」

「人殺しをさせるためにお前を助けたんじゃない」

「一ナはモンを睨み付けた。

モンはこぶしを作り握り込んだ。

「俺はもうすぐ十二歳になる。本当なら徵兵される予定だつた。どつちにしろ俺たちができることは戦争以外にないんだ」

「他の町へ助けを求める。そしてそこで安全に住むんだ」

「他の村へ行つたところでどうなるんだよ。難民となつた俺を受け入れてくれるほど裕福な村も町も国もないさ。差別を受けるだけだ。奴隸になつて飯も貰えず死ぬだけだ。」

モンはすくつと立ち上がつた。

「助けてくれてありがとう。でも・・・」

「でも?」

「二ーナはダルフィール人だ」

モンは二ーナに背中を向け、「次会う時は二ーナも俺の敵だ!」

そう叫ぶと走り去つていつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7224a/>

---

NINO's WAR

2010年10月28日05時57分発行